



新連載 高垣 愉佳

元々は、老人介護職を経て准看護師をしながら、立命館大学院の応用人間科学研究科で臨床心理学を学んでいました。

授業や実習、研究会等で団先生に、また研究会で千葉先生にお世話になったご縁で、今回連載の機会をいただきました。今はアメリカで主婦をしています。

私がお届けする「ラホヤ村通信」はアメリカ合衆国、カリフォルニア州、サンディエゴ郡、ラホヤ市という地域で暮らす、私と私の周りに居る人達の日常です。アメリカは広大で、合衆国という名前の通り、州によって法律も異なり、そこで暮らす人たちの人種も考え方も様々です。

ですから、この連載に出てくることは、今のアメリカの一側面であることは事実なのですが、一方で、これがアメリカの全てでは無いということも念頭に置いて、楽しんでいただければと思います。

新連載 見野 大介

みのだいすけ

陶芸工房 八鳥 hachi-dori

陶歴

1980 大阪に生まれる。

2003 近畿大学建築学科卒業。

2005 京都伝統工芸専門学校陶芸科卒業。京都炭山、笠取窯岡本彰氏に師事。

2011 奈良県奈良市法華寺町にて独立。特定非営利活動法人 京都ほっとはあとセンターより「ものづくり支援員」に任命され、社会福祉法人テンドーハウスへ出向する。

2012 第18回新美工芸会展 大阪市立美術館館長奨励賞

現在 新美工芸会 会友／泉涌寺陶磁器青年会 会員

展示会情報

【見野 大介 個展】

会期：2014.11.26(水) - 30(日)

10:30 - 18:00(最終日 17:00 まで)

会場：ギャラリーカフェタケノ

奈良市今御門町 32-1

<http://gallerycafe-takeno2010.jp/>

食器を中心に、現在制作中です。

水野 スウ

21美こと、金沢21世紀美術館。納品でちよくちよく行く機会のあるおかげで、すてきな企画は見逃しません。この夏は、21美常設「レアンドロのプール」でおなじみ、ブエノスアイレス生まれのアーティスト、レアンドロ・エルリツヒさんの個展「ありきたりの…」を見てきました。

一見ごく普通の緑の庭が、近づいてよく見ると、あれれ？なにこれ？どうなってるの？ええ～～！わかんない！と、wonderがいっぱいの「見えない庭」。空中にうかんでいる楽器を演奏できる「リハーサル」。決して登り降りのできないぐるぐるの「階段」。日本の町かどの水たまりに映るブエノスアイレスの街並みは、まるで地球を裏返ししたみたい。

レアンドロさんの作り出す、ものがたりのある不思議空間で、ありきたりをひっくりかえして、驚いたり、うれしくなったり、はしゃいだり、歓声あげたり。その度に、こころが動いて胸ん中にあたらしい空気ははいり。いいな、こういう体験、こういう感覚。

今年の私は、「愛をたやさない」を大切にしよう、と決めています。その心は――権力にあらがうのって、とても大きなエネルギーを使うこと。使うばかりじゃ疲弊するから、こころを枯らさないように、こころをできるだけふかふかに保っておくために、

私はこれまで以上に、逢いたい人がいたら逢いにいき、美しいものを見、美しい音楽を聴き、わくわくどきどきする冒険に飛び込んで行こう、って私自身に宣言したんです。

一つ一つはごくささやかなこと。レアンドロ展、然り。前から興味があったオルゴセラピーの体験、然り。姉の遺した着物をほどいて手縫いの服を作ること、然り。

そして今号にご登場の「園長からの伝言」を書かれた、稲城の保育園の園長先生に、10月に逢いにいくのも、然り。私のこころに、大好きなひとたちが住んでくれていること、逢いたいひとがいること、それも私流「愛をたやさない」の一つです。

早樫 一男

4月から児童養護施設で勤務することになり4カ月が経過しました。入所児童のこと、入所児童と職員とのこと、職員のこと etc、毎日毎日、考えることがあり、頭の中は落ち着かない状態が続いています。

私的には、前日も短信で伝えましたが、認知症の実母(84)と私達夫婦の暮らしが始まり、約3カ月が経過しました。夕食から就寝までの間、日によって、あるいは、時間によって変動する母の言動に付き合っています。できる限り、デイサービスやショートステイを使いながら、家族が必要以上にストレスを抱え込まないように考えています。

公私とも、決して落ち着いた生活ではありませんが、なんとか健康は維持しています。健康で過ごせることに感謝することを忘れないようにしなければと気がつきました！

西川 友理

本文にも書きましたが、「大阪のおばちゃん(あるいはおばあちゃん)はアメちゃんを配る」ということについて。

関西人ならだれでも、親類縁者のおばちゃんからはもちろん、電車の中で席を譲ったおばちゃんや、たまたま病院の待合室で隣に座ったおばちゃんに、アメちゃんをもらったことがあると思います。

個人的にはこの「アメちゃんシステム」、

ものすごくいい温度だなあと思うのです。

「はい、どうぞ」「あら、おおきに」というやりとりには、ちょっとした親切心と感謝のやり取り、嬉しいけれどお返しなきゃと思わずに済む程度の(物心両面における)ギフト、あげた方ももらった方もその瞬間は嬉しいけれど、すぐにさらっと忘れてしまえる程度のさりげなさ、心身の負担の少なさ。受け取るほうの心の状態によっては、時にはとても重要な意味を持つことがあるけれど、あげた方はそんな恩を着せようとは思っていない。もらったアメちゃんを今食べたくなかったら、ポケットに入れておいて後で必要な時に食べたらいい。自分がもらったものだけけれど、必要としている友人がいるなら、その人にあげちゃってもいい。これって、なんだかさりげなくって素敵なコミュニケーション！と思うのですが、いかがでしょう？

「ここから好きなん取りや」と渡されたビニール袋には、どうやって集めたのか聞きたくなるほど、多種多様なアメちゃんが入っています。これはおそらく仲の良いおばちゃん同士でアメちゃんをトレードしまくった結果なのでしょう。

時には、小さなお弁当箱に入った、氷砂糖やブドウ糖をすすめられることもあります。これはその場で食べなきゃいけないのでちょっと苦しいですが、その場で仲良くなったそのおばちゃんといっしょに食べて「ふへへっ」と顔を見合わせる、というのは、なかなか味の時間なのです。

中島 弘美

研究会のゲストスピーカーをお願いします！

対人援助学会の研究会は1年に3回あるいは4回、定期的に開催しています。

この研究会は学会の事務局の方々の協力とともに、これまで12回(通算 36 回)行われ、マガジンの編集者でもある千葉さんがお世話係です。もちろん現在も受け持っておられますが、そこに私も加わり、ゲストスピーカーお願いできませんかと依頼する役割などを担っています。

お話しいただけそうな方に研究会の主

旨を伝えてお願いすると、もろもろの事情でお引き受けいただけなくて、がっかりすることもあります。事情をうかがうと充分納得できるものなのですが次に依頼するときちょっとした勇気がいります。

そんななか、13回研究会(日程10月17日)と来年2月の開催が決定です。そして、その次と、さらに来年の夏以降の開催分の内諾もいただいているので、ちょっと見通しが明るいです。

今後、あなたにゲストスピーカーとしてお声をかけることがありましたら、ぜひお引き受け下さいますよう、お願いします！

浦田雅夫

団士郎先生にもご無理をいいご登壇いただきました「日本学校ソーシャルワーク学会京都大会」は300名以上の参加者で大盛況でした！ご参加いただいた皆様ありがとうございました。

国はスクールソーシャルワーカー1万人計画発表！どうなるのでしょうか。。。



尾上 明代

私の「癒し」の一つは、友人たちと美味しいものを食べに行くことです。普段は「まともな」ものを食べる時間もないほど忙しくしていて、長い休みのとれるときに、ちょっと贅沢をします。この夏、特に気に入ったところは、東京・板橋の「パリ四区」と東京・荻窪の「本むら庵」です。

「パリ四区」はどのメニューも外れがない本格的なフレンチです。ボリュームもとても多いのにリーズナブル。ワインの好きな人ならたまらない料理の数々でしたが、

私はアルコール依存症の方々の対人援助をしていることもあり(?)、一切飲みません。でもお料理だけで大満足でした。

もう一つ、お薦めの「本むら庵」は、石臼自家製粉、粗挽き、手打ちを貫く蕎麦屋さんです。めずらしい一品料理もたくさんあります。蕎麦がきが本格的。そして何よりお薦めは、季節の食材を蕎麦の中に、練り込んだ「〇〇切りそば」と言われるものです。この夏は、しそ切りそばを頂きました。いつも品切れなので、今回は予約でやっと実現して感動しました。何しろ限定ですから。手がかかり、高度な技術も必要なことから、何と一日に7、8人分しか提供できないそうです！他の季節には、桜切りそば、ゆず切りそばなどがあります。お庭もりっぱな盆栽などがあり素敵な風情です。多忙な人生の中の、本当に幸せな時間です。(今日は、「ぐるなび」みたいになっちゃった。。)

ところで、今回で連載はしばらくお休みさせていただきます。お読み下さった皆様、ありがとうございました。いつか次の機会に、別のシリーズを始められることを願っています！

木村 晃子

この6月から、地域の中で、「認知症予防体操になったらいいな～開発プロジェクト(通称 NYT)」という活動を始めました。地域の有志が集まって、体操を開発しています。

これまで5回の集まりを実施。参加メンバーは10代から70代まで。一般住民や学生、専門職。それぞれが体操開発に関係しています。体操内容を考える人、体操の曲を作る人、さらに編曲してレコーディングする人、活動風景を録画し記録に残す人・・・自主的な集まりなので、予算などは全くついていず、参加者各自の時間と得意技を提供している形です。

毎回、毎回、笑いが絶えない活動です。初回ヴァージョンはいったん完成。今後、更なる精査を重ね、本物の認知症予防体操を目指して活動は続きます。

北海道 当別町 普段はケアマネジャーとして高齢者支援をしています。

藤 信子

リスボンでは、とても食べ物に恵まれた。魚介類を焼いたり、ゆでたりしたシンプルな料理が美味しかったのと、珍しかったのはタラ(干したものを戻したもの)の入った小さなコロッケ、それにお菓子がいろいろ美味しかった。色んな種類のお菓子—豊富なケーキ、クッキー等—を味わうと、確かにこの国は昔、栄えていたのだろう。大通りや公園の必ずある銅像を見ると、国の栄枯盛衰を感じる。「一億総中流」と言っていた日本は、いつの間にか少し昔になった。でも自分たちは中流だと感じる人たちが多いということは幸せな国だったのだろう、と過去形で振り返っていることが少し悔しいし辛いと思う。

中村 周平

いつも私事になっておりますので、今回は違う内容を…。先日、ネットのスポーツニュースで、知り合いの方が取り上げられている記事を見つけました。その方は、トップリーグという、日本のラグビーのトップリーグでプレーをされ、過去には7人制、15人制の日本代表にも選ばれたことのある、「第一線」で活躍されていた方です。2010年に引退されてからは、京都の大学院で修士号も取得、まさに文武両道を地で行かれています。そして、さらにすごいことは、引退から3年のブランクを経て、7人制の日本代表にチャレンジされているところ。実際に、日本代表の合宿にも参加されていて、先日、お会いした時にも、「目標は再来年のリオオリンピック！」とおっしゃっておられました。スキージャンプやサッカーだけでなく、ラグビー界にも「レジェンド」が誕生されることを心から応援しております。

浅田 英輔

最近、家の居間に本棚を買いました。細くて背が高いやつですが、すぐいっぱいになったので、もうひとつ同じものを買いました。すべてマンガ本のためです。子どもが小学生になると、親に似て大変なマンガが好きになりました。環境って大事なんで

すね。最近のオススメは、「ハイキュー！」というバレーマンガ。ワクワク感が素晴らしくて、バレーしたくなります。できませんが。ツッキーのクールにかっこよくあろうという姿勢はきらいじゃないです。週刊少年ジャンプなので、小学生にもOKです。もう一つは「リアル」というマンガ。スラムダンクの井上雄彦さんが作者です。車いすバスケが中心ですが、いろいろな物語が含まれています。エロもグロもないですが、描写が大人向けです。小学校高学年の息子は読んでいましたが、ちゃんと楽しめるのは中学生以上だと思います。「このままじゃいけない、何かしなきゃ！」というやる気を引き出してくれるアツいマンガです。ともちゃんにはがんばってほしいです。アニメの悪影響だとかいろいろ騒がれますが、子どもに見せたいマンガ、大人の元気が出るマンガもたくさんありますよね。「マンガなんて・アニメなんて・ゲームなんて低俗だ」なんて顔してるより、「面白いものもいっぱいあるよ！つまんないものもあるけどね！」と自由に選べる人になって欲しいです。



中村 正

東京の山谷や新宿・大久保などで野宿者支援をおこなう「自立支援センターふるさとの会」の代表として活躍する教え子からいろんなイベントの案内をもらう。大事な活動を幅広く実施しており、年間事業予算からすると相当な社会的活動をしていることがわかる。たいしたものだと思う。現役の院生たちもそれぞれ面白い関心をもって話をしにくる。スペインの「オンブレ(人間回復計画プロジェクト)」という団体は薬物依存症からの回復に取り組むが、回復の理論を精緻にプログラムへと組み立て

ていて、スペイン各地に広がっているようだ。そこに1年かけて参与観察している院生がいる。報告に帰ってくる時が待ち遠しい。ハワイに住む院生もいる。同じような依存症者の回復施設「Habilitat(ハビリタット)」についてレポートしてくれた。ネイティブ・ハワイアン伝統的な問題解決法、ホ・オポノポノ文化による精神的健康と依存や暴力からの回復をめざす実践(大きな家族による対話をとおした善の追求方法)が面白そうだ。もっと紹介したいくらいだが院生たちの研究テーマを深めていくことで学ぶことがこちらも多い。私も時間をみつけてはこうしたユニークな取り組みをしているところに出かけることにしている。何度か紹介しているイギリスの「児童移民基金」、性犯罪者の社会復帰を支援するイギリスの「Circles UK」など数多く訪問してお話を聞いてきた。問題だらけの世界だが、そこから何とかしようとして面白い活動がたちあがる。こんなことができるのかという驚きと、対応している社会問題の掘り起こし方に感心する。深刻になるだけではなく、時には奇想天外に実践活動が生まれているのが面白い。世の中まだまだ可能性がある。知らないことが多い。だから勉強しなくては。

坊 隆史

2014年10月で東海道新幹線が50周年を迎えるとのこと。夢の超特急と称された開業当時は最高時速210km/h運転。今でも最高285km/h運転ということを考えれば当時の技術者の方々の知恵と努力にはただ頭が下がるばかりである。新幹線に匹敵するような夢の対人援助術ってないのかなあ、と新幹線の中でふと夢想してみている愚かしい私である。真摯に経験を積むのみと反省！

松本 健輔

専門学校で教えに行くようになって3年目になる。今まで教えるということに関心が薄かったが、生徒の成長を見ることがすごく楽しい。食わず嫌いはダメなんだと改めて実感。この機会をくれた先輩に感謝。

牛若 孝治

「人の役に立つ」とはどういうことか

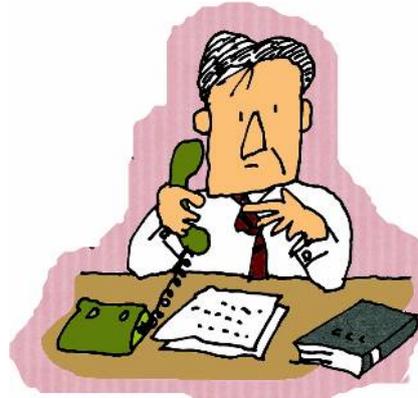
目的地が分からなくなったとき、私はよく周囲の人たちに聞いてみる。「どこそこへ行きたいんですが場所はお分かりですか?」と。すると、「すみません。私、地元ではないので分かりません」。その答えを受けて私は、「分かりました。ありがとうございます」。しかし、私に「ありがとうございます」と言われた相手はどれも納得していないようで、こんな言い訳をする。「お役に立てなくてごめんなさい」。この言葉にぶちきれた私、「『お役に立てなくてごめんなさい』とはいったいどういう意味ですか?」とストレートに聞いてみる。すると、私にストレートに聞かれた相手は、いささか後ろにのけぞるようになり、「いえ、、、」。私はなおも言う。「あなたは十分に役に立っていますよ。分からないことを素直に「分からない」と言ったことが」そう返答しても、相手はきょとんとして納得がいけないようだ。

「人の役に立つ」とはどういうことか。それはなにも人のために「何かをしてあげる」だけではない。できないことを「できない」と言えること、つまり、相手の要求に対して、自己の身の丈に合わないと判断した場合は、そのことをはっきり言えることもまた必要だ。そういうときに、わざわざ「お役に立てなくてすみません」などと弁解する必要はない。

袴田 洋子

8月29日、お元気なシニア世代の方たちの組織活動「自由時間倶楽部」というところで、「リビング・ウィルを書こう」ということについて、お話をさせていただきました。内容は、専門職大学院での私の実践研究のテーマ、そのままです。勉強会の後、懇親会にもおじゃまさせていただき、現役を引退されたけれども、まだまだお元気な大先輩方のお話を、仕事ではない場面で聞かせていただき、私は大きな影響を受けました。「援助職」の自分が持つ傲慢さを

を自覚できました。高齢者の人たち、ご家族たちが、自分より若い年齢の私に「合わせてくれている」ということが、理解できた気がしました。許してくれている、とても言えますか。私なんか、偉そうにパワポスライドで話している場合ではないと思いました。それと、テレビ東京制作の「モリのアサガオ」というドラマを、オンデマンドで一気に視聴しました。死刑囚と刑務官との交流を描いた話です。「死に向き合う死刑囚がどう、気持ちよく死刑を迎えることができるか」という台詞があったのですが、高齢者福祉に似ているなあと思いました。



団 遊

10年来の付き合いがある仕事仲間が、先日、特別養子縁組で子どもをむかえた。ずっと欲しかったが子室に恵まれず、年齢的なことも考慮して決断した。仲介団体が実施する審査・面接に合格し、待つこと数ヵ月。明日かもしれないし、1年後かもしれない、という落ち着いた日々は、土曜日にかかってきた一本の電話で急変した。「来週火曜日に、赤ちゃんが行きますから」。遂に巡り合った赤ちゃんは生後1週間の女の子。来るまでは「早く来て欲しい」と思うが、いざ3日後になると「もうちょっと準備させて欲しい」なんて。そんな笑い話も、親ばかの一環。今は、その夫婦が話す「親ばか話」を聞いているのが楽しく、こちらまで幸せをもらっている。

乾 明紀

5月16日に誕生した長男と妻が、8月の末に堺市の実家から京都に戻ってきました。妻の実家に3ヶ月以上もお世話にな

っていたわけですが、私も週4日ほど居候しておりました。堺市から京都の職場への通勤は、ラッシュアワーに加え約2時間かかりますので、少々辛いものでした。しかし、妻は2時間おきに授乳をしていましたので、それくらいで辛いと言っては怒られません。読書などの楽しみを見つけながら通勤していました。

実家にいる間は、明るいご両親と義妹にとってもよく面倒をみてもらいましたが、あるとき、私にも子供にも優しい妻がこう言いました。「虐待は決して許される行為ではないけど、虐待をしてしまう精神状態に母親が追い込まれてしまうのはわからなくもない」と。幸いなことに、妻は両親らの支えを得ながら子育てをスタートすることができましたが、愛情や優しさを発揮するためには、そうできる環境が大切であることを改めて実感しました。私自身も愛情を注げる環境を構築しつつ、妻を支えながら妻と一緒に子育てを楽しみたいと思います。

サトウタツヤ

本文でもふれている8月半ばの欧州への往復の飛行機で、『るろうに剣心』という

映画を見たり、乃木坂46「夏のEASY&FREE」という曲を聴いたりした。映画は飛行機の中でしかほぼ見ない。感想は…。ついでながら私はハッキリ言って(B級)アイドルグループが好み。乃木坂46をB級と言うと怒られるだろうから、違う言い方をすると、濁ったユニゾンが好み。

また、ジャパニーズポップスの年代ごと特集があったのだが、1970年代が一番しっくりきた。小中学生のころ、桜田淳子さんが好きだった…ということも思い出し「夏にご用心」などという曲を久しぶりに聴いた。昔の楽曲は短い。キャンディーズの「暑中お見舞い申し上げます」も聴いたが、これは濁ってないユニゾンでした。さすが、キャンディーズ。

大野 睦

ネイチャーガイド 有限会社
社ネイティブビジョン 代表取締役 屋久島青年会議所 副理事長 BLOG やくしまに暮らして <http://mutsumi-ohno.seesaa.net/>

夏真っ盛りの屋久島です。この島では9月いっぱいまでこの気分でいられますが夏に欠かせないのが、ギラギラとした陽射しとそして台風なのです。もう10年以上も大きな台風の直撃はないのですがやはり凄まじい雨や風、高波を見ていると言葉では表現できない自然の威力を感じます。

大石仁美

先日、かわいい坊やのお母さんからお便りが届きました。「とても楽しく過ごさせて頂いているようで、体調を崩しても、子どもサポート行く!!と喜んでくれています。親としては、安心してお願いできるので、子どもサポートさんの存在がとても頼もしいです。今後ともよろしく願いいたします。」

この坊やは、朗らかな子で、素直で愛くるしく、お話を聞いているだけでこちらの方が楽しく、来てくれると嬉しくなるような子なのです。

お迎いの時のお母さんとの会話や、ふれあいの様子などをみていると、ほのぼのと幸せな気持ちにしてくれる親子でもあります。

私たちは、そうした場面で教えられることが多いです。子どもがにこにこお母さんのそばに駆け寄ると、「思ったより元気そうでよかった。」と子どもを抱きしめます。そして、「楽しかった？ふん、ふん、よかったねえ。」と愛しそうに子どもの話に耳を傾けるのです。このような母親のもとで育つ子は、本当にのびのびして、優しいです。

こんなゆとりのある子育てがどの家庭にも出来たらなあ。

子どもの貧困が社会問題になっている今、考えさせられる課題です。

村本邦子

今年の春で大学の役職からすべてはずれ、女性ライフサイクル研究所の代表を降り、子どもたちも独立して、本当に久しぶりに私自身に戻ったような気がしている。6月には学会を引き受けたり、昨年から持ち越しの原稿があったりと、多少引き

摺るものはあったけれど、この夏、晴れて自由の身になった。途端に頭が冴え始め、「次は何をやるのかな？」とウズウズ。夏の休暇中も、ものすごく仕事ははかどり、原稿がたくさん書けた。この開放感と満足感！

…と喜んでいたのも束の間、その後、ひどい神経痛に見舞われ、悲惨なことになってしまった。「働きすぎのストレスじゃないの!？」と心配してくれる人たちもいるけど、そう言われると良心が痛む。今回ばかりは、遊びすぎのストレスなのだ。神経痛の原因は帯状疱疹で、その引き金は日焼けと紫外線アレルギー。そして、そんなことになった理由はたとえば、手の届くところにだけ日焼け止めを塗って、背中丸出しのビキニで1日ボディボードに乗っていたから。我ながら情けない…。

國友 万裕

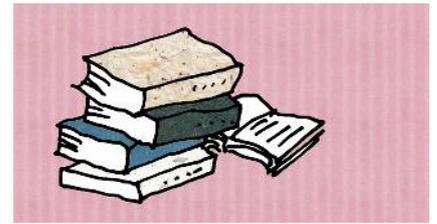
ぼくの2冊目の単著『BL時代の男子学世紀末のハリウッド映画に見るブロマンス』(SCREEN 新書)がついに発売になりました。前著の『マッチョになりたい!？世紀末ハリウッド映画の男性イメージ』(彩流社)からちょうど3年ぶりです。前著は、タイトルとは裏腹に学術本ですが、今回はあくまでも一般向けに、20代くらいの人を讀者に想定して書いたつもりです。新書なので価格も手頃です。皆さん、ぜひ、読んでみてください。

現在の出版事情は厳しく、そのなかで2冊目の単著が出せたのは幸運だったと思っています。俺は不幸だと思って生きてきたけど、意外に恵まれた人生なのかも知れません。できたら、『男は痛い!』も、本に結実させることができればいいんだけど、これは難しいかなあー。とりあえず、連載続けていってチャンスを待ちましょう。

去年の夏は、若い友人と海や川に行けて、本当に楽しかったのですが、今年は友人たちの都合が悪く、ぼくのほうも忙しく、なかなか海や川に行けそうもありません。その点が心残り。でも、本は出だし、何もかも上手くいくってことはないから、今年はこれで満足です。

もう50だもんなー。

これから人生の秋、一步一步かみしめながら、今日を生きていきましょう！



北村真也 私塾「アウラ学びの森」

(<http://auranomori.com>)、フリースクール「アウラ学びの森 知誠館」

(<http://tiseikan.com>) 代表。

今年の夏休みは、珍しくずっと京都にいます。特にやることのない時間を、久しぶりに満喫している今日この頃です。でも盆明けからの2週間は結構忙しくなるので、今のあいだに体力を蓄えておかないと…。

古川秀明

前回までで家族塾の概要は説明できたので、今回からは実践報告という形にしました。毎回全ての授業内容を報告するのは難しいので、その都度、いろんな授業の様子をレポートしたいと思います。今回は仮説実験授業(科学・理科)をレポートしました。

団士郎

2015年3月5日～10日、ニューヨークのTENRI CULTURAL INSTITUTE OF NEW YORK(43A West 13th Street)ギャラリーで「木陰の物語」展をやります。そのために今、様々な準備をしているところで、巻頭掲載した木陰の物語・扉・英語バージョンも、そのひとつです。

英訳ではいろんな方のお世話になっていますが、翻訳されたもののニュアンスが分からないので、どれが一番、私の原文に近いのかが見えません。翻訳するとはこういう事なのだと、今更ながら思い知るところです。

In the shade of family tree は私の感覚で、スタート時点に付けた「木陰の物語」の英語版タイトルでした。

トを見つけるという報道の仕方は、今回のW杯だけでなく様々なところで見受けられますし、ますます質が悪くなっているように感じられます。

日本代表のキャプテンを務めた長谷部選手が、W杯後に自身のブログで次のように語っています。「今回、改めてサッカーは世界の文化であると感じました。その中でも強豪と言われる国は100年、200年といった歴史がありサッカーが文化として深く根付いています。(中略)選手が高い意識を持って成長しなければいけない事は大前提ですが、日本の皆さんにはW杯や日本代表の試合だけでなく、日本サッカー全体に目を向け、時には厳しく時には温かく共にサッカー文化を創り上げていっていただきたいと思います」。今回の優勝国であるドイツのリーグに所属し、文化としての成熟の差を感じながらサッカーと向き合う長谷部選手のメッセージに深く共感しますし、メッセージ中のサッカーは色々なものに置き換えられるように思います。
※勝手ながら次号(19号)及び次々号(20号)は、諸事情のため休載します。

河岸 由里子

「還暦を迎えて思うこと」

「還暦」というと、孫が何人かいて、高年齢で、「のんびり」というイメージであった。しかし、実際自分がその年になってみると、まだ「おばあさん」とは呼ばれたくない。孫どころか子どもたちは結婚もしていないので、「おばあさん」と呼ばれるのはまだ先の話だが、周りから見れば「おばあさん」の仲間入りなのかと思う。肉体的にも精神的にも衰えを感じるが、のんびりとは程遠い生活をしている。人生60年の時代では、還暦を迎えることでさえ大変であったのが、喜寿、米寿、卒寿、白寿を祝う事も増えた。長寿になったことは喜ばしい事であるが、飽食の時代に生きてきた我々の世代では難しいのかもしれない。

寿命はあとのどのくらいなのか。もしかしたら明日事故に合うかもしれない。そう思って今日をどう生きるかを大事にしてきた。今日やるべきことは出来るだけ今日片付け、明日延ばしにしない、と同時に明日が

来たら、過去は引きずらない。ひたすら前を向いて走ってきた気がする。まだまだ走れるかもしれないが、そろそろスピードを緩めようかと思いはじめ、ここ数年は、毎年のように仕事を減らそうと努力し、結果的にはプラスマイナスゼロを繰り返している。

地域で活動を始めて19年、かかしを開業して10年。地域を中心に道内では私の活動を評価して貰えることも増え、広く社会貢献にかかわる職を依頼されることも増えた。諸先輩に比べれば、まだまだ若輩だが、仕事を始めたころ関わった子ども達が、父や母になり、世代交代しているのを見ると、自分自身も世代交代を考えねばならないのではと思うようになった。大して長い年月ではなかったし、まだまだと思うところもある。しかし、後継者を育てて行くことも地域に根差した活動をしている者にとって重要な課題である。

臨床心理士として、かかし主宰者として、その他諸々の仕事を請け負っているものとして、そのすべてを誰かに引き継いでもらおう。還暦を過ぎてからの日々はおまけと考え、「今から少しずつ引継ぎをすすめ、同時に次の夢に向けスタートを切る。」それが還暦を迎え思ったことである。

臨床心理士 北海道
かうんせりんぐるうむ かかし 主宰

岡崎 正明

本文で「選択」にまつわることを書いたこともあって、最近この言葉について考えることが増えた。

シーナ・アイエンガー教授の『選択の科学』という本を手にとったのもこれがきっかけ。相変わらず和訳本の独特の文章が苦手なのだが、内容はとても興味深い。社長の方が従業員より長生きなのは、選択権・裁量権の多さにあるという。ポイントは、「選択できるかできないか以上に『選択できている』と思っているかどうか」だとのこと。なるほど。文中に「物語(ナラティブ)」という言葉まで出てきてびっくり！職場の親しい同僚に、思わぬ場所でお会ったような気分になった。

大事なものは、事実そのもの以上にそれ

をどう「語る」か。意味づけるか。

やはりそうなのだなあ。そう思ってまず実行したのは盆休み。車での遠出は決定事項だ。ならば渋滞を避けるために選択の余地なく早起き・・・ではなく、現地で喫茶店のモーニングを食べることを目指し、朝4時に起きるという「選択」をして出発。おかげでロングドライブのストレスから随分解放された。小さな非日常体験と、有意義な読書の時間もできた。何より自分の思い通りに事が運んだ気分になれてサイコー。う～ん、奥が深いぞ「選択」。

ご意見・ご感想・講演依頼など受付けております。buimen0412@yahoo.co.jp



三野 宏治

今回休載いたします。

八月末にPCが退院してきました。お盆明けに重いもの(象の置物)が落ちてきて(落としてしまって)PCと刺してあったUSBメモリを直撃。メモリスティックは折れて(数個にわれて)修復不可能、PCは部品とりかえて今日手元に戻りました。モノは取り返し効きますが無くなったデータ(今回の原稿含む)はどうしようもなく、ものすごく痛い。バックアップ後に追加したモノもあり唖然としていた数日でした。『この世でいちばん大事な「カネ」の話』(西原 2011)ではないですが、誰かと『この世でいちばん大事な「データ」の話』をしたい気分です。

以上

鶴谷 主一

8月24日、幼稚園の夏休みも今日で終了、明日から始業式という日曜日に18号の原稿を書いていた。今年の夏も預かり保育といって幼稚園でもオプションで子どもたちを預かる制度をやっております(1日500円/お弁当持ち)

マガジン 6 号でも紹介したシステムですが、今年の利用者の約半分が卒園生の小学生でした。仲の良い友達と示し合わせて幼稚園に来てくれたり、親の仕事で連日通ってきたり理由は様々でしたが、平日に学童保育(放課後児童クラブ)を利用してない小学生の行き場がないのだなあ、という感じも受けました。

平日利用しないということは、「子どもが学校に行っている間に母親が仕事をしている」家庭で、夏休みだからって仕事は休めないし、短期で日中預ける場所もないということなのでしょう。

子ども子育て新制度では、放課後児童クラブの利用者を現行の4年生から6年まで広げるということで、市の担当者はまたアタマの痛いところらしいですが、その枠からもこのタイプの子どもたちは外れるわけですねー。

ここまででは行政も手がまわらないでしょうねえ。

原町幼稚園ホームページ

<http://www.haramachi-ki.jp>

メール osakana@haramachi-ki.jp

ツイッター haramachikinder

千葉 晃央

ミニ連載:

■私がしている文章の書き方6 ■

私がしている文章の書き方の連載7回目、いよいよ最終回です。

大きな6 手順

- ①箇条書きでいいことをかく
- ②丁寧に膨らませて文章にする
- ③プリントアウトをして、前後の入れ替えを考える
- ④接続詞等、つながるように加筆
- ⑤「です」「ます」、「である」の判断
- ⑥音読で確認
- ⑦黙読でも確認

今回は「⑦黙読でも確認」です。音読後、しばらく書いたものを時間を置くこともあります。「寝かせる」と言ったりしますね。これまでの工程で気になることをみることができていますが、

時間をおいて読むと違和感を覚えることが多いです。

それを最後に手直して終了。あとは自分のもとから手放す勇気です。そのかわり加筆修正、ご指導お願いします！というのが私のやり方です。

文章を書くことなんて考えてもいなかった自分。

今はこんなやり方をしています。

文章は残るのでいいですよ。

(完)

大川 聡子

ニュージーランドで10代の母親の支援をされているNGOのマネージャーの方に「スカイプしませんか」と誘われました。私の英語力で会話が成立するの不安です…。他にももっと英語できればよかったのに、と思うことが最近多々あって、時間を見つけて勉強しようかなと思います。

大谷 多加志

色々なタイプの人があります。身近には「負けたら必ずリベンジする」という人がいて、何か失敗したら、なぜ失敗したのかを分析し、対策を練って再度挑戦するのだそうです。そうすると、同じ失敗を繰り返すことがないらしい。なるほどと思いました。

自分を振り返ると、同じ失敗を何度も繰り返している。「負けたら次は！」と闘志を燃やしたことも、あまりない。それが自分のタイプのようなのです。そんなことを考えていて、ふと、ある会合のことを思い出しました。数年前から関わっている長期プロジェクトの会合なのですが、基本的に提案の大半は通りません。却下や保留になることがほとんど。その中で条件付きであっても前進するものがあればひとまず満足していました。勝つどころか、たくさんの提案の中で「1引き分け」でも取ればよしという心持です。それから2年あまり、気が付けば同じ会合で、2~3割の勝率が残せるようになってきました。かなりの進歩です。最後まで勝率10割にはならないでしょうが、現在の勝率のままでも、プロジェクトのゴールには辿り着けるだろうと見込

んでいます。あまりスマートではないけれど、自分の身の丈に合ったやり方のように思います。マガジンの連載もこれで9号目。相変わらずやっとのことで原稿を上げている有様ですが、これからもこの調子で泥臭いこうと思います。

竹中 尚文

今年のお盆参りで、熱中症になった。医者に「炎天下で作業などしましたか？」と尋ねられた。屋内から屋内へ、その移動は車だった。自分でもまさか熱中症になるとは思わなかった。お盆の直前の土日は予定がイッパイである。お経もさることながら、時間の許す限りしゃべる。話題は多岐わたる。気付けばトイレに行く時間がない。水を飲む時間がない。◆土曜日の夜、帰宅してから疲れたと思って横になった。身体を起こせなくなっていた。疲れと言うより言いしれぬ苦しさや虚脱感があった。発熱に気付いたが、熱中症とは思わなかった。解熱剤は効かない。熱中症に解熱剤は無効だそう。頭や首をアイスノンで冷やした。症状は悪化するばかりで、台風が通過する中を救急搬送してもらった。早期にしっかり冷やすべきであった。首、両脇、鼠径部を大量と思える程の氷で冷やすべきだった。◆私に話して聞かせたいと思っている人がいる。この時が、坊さんとして生きている時である。東奔西走、まだまだ頑張りたい。

浄土真宗本願寺派専光寺住職

川崎 二三彦

リフォーム問題(3)引っ越し



我が家のリフォームが、ついに本格稼働することに相成った。今回は、引っ越し騒動の顛末を記録しておかねばならない。何しろ、自宅新築して四半世紀。その時には、転居することなど考えもしなかったのも、ものはあふれているし、あちこちガタがきているのだ。

ただし、大がかりなリフォームのためには、一時的な引っ越しが必要となる。近くの不動産屋に何度か足を運び、エイツとばかりに物件を決めた。駅から徒歩 2 分のコンビニの隣、道路を挟んだ向かいには警察署があるから安全は十分で、1 階は居酒屋になっているマンションの 7 階。便利この上ないが、電車がうるさいのは織り込み済みとしても、終電が出た後の深夜 2 時、3 時まで 1 階の客の喧噪が続き、朝ともなれば、警察署の柔剣道場から激しい練習の音が響いてくる。まことに賑やかな場所であった。それはともかく、ほっとする間もなく引っ越しのための荷造りに取りかからねばならない。幸い、当面不要の荷物は工務店が預かってくれるというので、入り用のものだけまとめることにした。

それにしても、工務店は取りかかりが早い。運送会社に来る前からやって来て、保管用荷物を運び出し、引っ越しのトラックが発するや否や、早くも家を壊し始めるではないか。連れ合いは、愛着のある我が家が壊されるのは見るに忍びないなどという。



それはさておき、転居先は想像以上に狭かった。そのため、せつかく運んだ荷物の一部を、苦勞してもう一度リフォームする我が家に持ち帰る始末。むろん、工務店に保管してもらおうという魂胆だが、その 1 個がやけに重い。引っ越し業者のすごさに改めて感心した。

こんなことばかりしていたら、8 月末から

9 月にかけて頼まれていた仕事の準備が、かつてないほどのピンチに見舞われた。それに、「今回は引っ越しの顛末を書く」と言いながら、締め切りには大幅に遅れるわ、内容はきわめておざなりになるわで、一体この先どうなるものやら見当がつかない。(つづく)



(2014/09/06 記)

荒木 晃子

「永遠の0」を観た。そこには、かつて特攻隊員だった父の姿があった。日本国海軍航空飛行隊予科練甲飛隊。世にいう零戦特攻部隊—それが父の所属部隊だった。

生前、父は娘の私に向かって、「あと1週間、戦争が長引いていたら、晃子は生まれてこなかったんだよ」と幾度も言っていた。私はそれを、いつもの父のジョークだと思ってきいていた。だって、笑いながら言っていたから。でも、それは真実だったのだ。

「永遠の0」を観た。私の知らない特攻隊員だった頃の父。戦う術を知らず、ひたすら大切な人が生きて戻ってくることを信じて待つ、無力な家族の命を守るため、そして、愛しみ育ててくれた父と母、そして幼い弟妹のために、ころのどこかで戦うことを恐れつつも、自らの命を決して顧みることのない青年たち。父はその中のひとりだったのだ。

「永遠の0」には、かつて、若かりし頃の父の姿があった。学徒動員兵とは少し違った、志願兵であり特攻隊員であった父は、最終決戦までに九州の地を飛び立つことなく、終戦を迎えた。

父は語る。沢山の戦友がゼロ戦に乗り、飛び立つのを幾度も見送った。彼らは誰

一人として帰るものはいなかった。自分は、今日か明日かと、搭乗する順番を待っていた。しかし、二十歳に満たない飛行隊員は、いつも最後に順番をまわされるのだった。

当時は、それが悔しくてならなかった。当時の様子を語る父は、遠く悲しいまなざしをしていた。

目を細め、娘に向かって父は語る。いま、お母さんとお前を見ていると、生きていて本当に良かったと思う。戦後も何十年と「生きていてよかった」とは言えなかったけれど、お前たちになら言える。お母さんと出会い、晃子が生まれた—それだけで、生きていてよかったと思えるんだ。父は、まるで何事もなかったかのように、やさしい目をして微笑んでいた。

今年には戦後 69 年。テレビでは、このほか戦争をテーマにした番組が多かったように思った。